

<金融史パネル>

明治期の銀行業における自己資本と経営行動の変化： 銀行マイクロデータを用いた分析

愛知学院大学 三浦一輝

本研究は、明治期の銀行マイクロデータを用いて、日本の銀行業における自己資本の役割と経営行動の変化を明らかにする。日本の金融史研究は、日本の銀行システムの中核をイギリス型の預金銀行であったと位置付けてきた。他方で、当時の普通銀行の貸付原資は、預金と並んで自己資本が大きなウェイトを占めていた。銀行はいつ、どのように資金原資の中心を自己資本から預金へシフトさせたのか。1903（明治36）年から1913（大正2）年度に発行された『銀行通信録』（東京銀行集会所）と『銀行総覧』（大蔵省理財局）に収録される銀行財務データを接続し、11年度×約1300-2000行のマイクロデータセットを構築する。自己資本比率はどのように変動したのか、株式銀行と非株式銀行の行動に違いはあるのか、どのような銀行がどの地域に分布していたのか、また貸出金や預金、利益とその配分などについて記述的分析から実態を明らかにする。